浜本はつえ詩集『斜面に咲く花』解説

越前に生きてきた人の独自の詩の風景

佐相　憲一

一

浜本はつえさんの詩には、越前の風が吹いている。

福井県越前の海には独特の趣がある。濃い青にどこかさびしい感じがあって、丘の斜面には厳しい寒さの中にも、白と黄色の水仙の花が揺れ、漁港としてにぎわった農村の記憶が影となって揺れている。越前蟹やホタルイカなどの海産物に恵まれているが、時代の流れが急速にこの地を襲っている。最近では若狭湾の原発問題もある。

断崖に面したこの海のようにたくましく、人は生きてきた。

そんな福井には独特の抒情風土があるが、この記念すべき初詩集の浜本はつえさんの詩世界には、そのようなことすべてを想起させる味わいがある。

越前の描写から個の内省、身近な人々との関係性にいたるまで、一篇一篇を大切に読みたくさせる切実性が詩集全体に貫かれている。複雑な人生をしっかりと歩いてきた人の生活実感ある言葉の重みだ。

二

浜本はつえさんは十代の頃に詩を書いていたがその後中断し、主婦生活において母親としての役割にもひと段落ついた頃、本格的に詩作を再開した。そこには「書かずにはいられない」思いがあった。

幼少時からたどった複雑な関係があり、作者はこどもの頃から「思うこと」や「見つめること」を重ねてきた。実父の死と母の再婚による弟との別れ、地域社会や母をめぐる葛藤などを生きながら、作者は越前の海と花に毎日のように励まされ、成長していった。後に、夫やこどもたちや孫たちと平和な家庭をつくることでさびしさは癒やされていったが、人間存在の内深くうずくものは、越前の海を背景にずっと揺れてきたのだろう。

浜本さんと初めてお会いしたのは二〇〇八年の詩人会議の夏の詩の学校（岩手花巻）だった。私はある講座の講師を担当したが、さまざまな講座の参加者が自由に会える休憩時間に、かねてから詩的親交のあった福井の浅田杏子さんや中林千代子さんと楽しく対話した。その時に浜本さんがいっしょにおられたのだ。その後、二〇〇九年の夏の詩の学校（山口長門）では、浜本さんは私の担当講座に参加してくださり、古今東西の名詩を鑑賞したり、参加者の自作詩を合評したり、とても充実したひとときをごいっしょさせていただいた。

また、私は福井の詩誌「水脈」グループ（代表・稲木信夫さん）と親しい交流を重ねさせていただいていて、福井のつどいに呼んでいただいたり、記念講演などもさせていただいたので、そこでもお会いすることができた。

お会いする度に感銘を受けるのは、浜本さんのひたむきさと誠実さである。詩のことを吸収しようとされる熱心な姿勢には頭が下がる。書いたものを他者に見せて積極的に批評を求めるその姿は、人生経験では大ベテランの方であるだけに、いっそうの敬意を覚えずにはいられない。

そして、福井の地元でも、浜本さんはこの数年間に積極的にいろいろな集まりに参加し、投稿している。

深い味わいを表現するにいたった浜本さんから

「詩集を出したい」という相談を受けた時、私は厳粛な気持ちになって心から歓迎した。なぜなら、この詩人の誕生には、一九四八年の出生から今日までこの女性の背負ってきたものからにじみ出る人生的な実感が強く感じられたからである。そして、福井越前という私にも親しい土地の草の根から、こんなにも生き生きとした生活の詩人が出て来たことが本当にうれしくて、お役に立てるなら喜んでお手伝いさせていただきたいと申し上げたのである。実際に編集してみると、個々の作品に通底するものを次々と発見し、これはいい詩集になると確信した。

三

浜本はつえさんの詩世界は生活感のある抒情が持ち味だが、安易な感傷には流されていない。優しい抒情はさまざまな情景描写と結びついていて、凛として自立している。

鮮明に詩情豊かに展開されるが、どこかさびしくせつないそのひとつひとつには、冷静に客観視しているもうひとつの眼があり、内省のありように読み手が共感する余韻と間がある。

そんな浜本さんの詩には、先ほど述べたような越前の風が吹いている。

この詩集のタイトルにもなった作品を引用しよう。

斜面に咲く花

ここで暮らしていた昔の女たちは
急斜面の畑を耕しながら
漁獲で満載になった船が
入り江に入ってくるのをいつも待っていた

山の斜面から
時々顔を上げ
腰をいっぱいに伸ばし
空と海の境目の水平線を見渡し
遥か沖の向こうから
エンジン音を弾ませながら
船体が徐々に現れてくるのを
いち早く確認すると
段々畑の坂道を転げ落ちるように駆け下り
漁船からの水揚げを手伝っていた

冷蔵設備も完備されていなかった
道路状況も悪く
運送手段も確立されていなかった時代
豊漁続きだった
獲れ過ぎて捨てられた魚の腐敗臭が
暑くなった昼などは地域中に溢れ
吐き気がするほどだった

伝説が過ぎ去った現在
活気で溢れかえっていた漁港は
ほんの数隻の漁船と廃船

海水を原子炉の冷却水として
毎日何十万トンも巡回させ
その超高熱の排水をちょっとだけ冷まし
また海に放出させている
プランクトンは完全に死滅状態
戻された海水には小魚の餌がない
回遊魚も小魚のいない近海に寄ることは
稀のようだ

原因はそれだけが全てでもない

度重なる沿岸工事
排水などによる海への汚染
関係はさまざまにあるだろう

意気揚々と船で戻ってきた男たちも
海を真下に見下ろしながら
ひたすら待っていた女たちも
皆とっくに別の世界に逝ってしまった

集落の山の斜面では
あまり耕作しなくなった段々畑に
自然に生えた水仙の花だけが
くる年毎に
忘れないで
咲き揃うのだ

これは越前の歴史的生活風景描写と時代批評であると同時に、作者が幼い頃から見てきた海と人と花の「詩の心」の原点的風景である。

四

詩集は三章に分かれている。

第一章「わたしの越前」十四篇には、越前の地で営まれてきた暮らしぶりや風景が、自らの家族との回想に結びついた形で描かれている。

冒頭の詩「海のみえる露天風呂」は生活者としてのひとりの女性が地域の露天風呂から海を見る何気ないシーンだが、作者の見てきた情景はこの海から始まると予感させる。

先に引用した作品「斜面に咲く花」から「時化（しけ）」「出漁のとき」と、越前漁港の貴重な刻印が三篇続く。昔の漁師や畑仕事の女性たちの様子、船と農漁業の様子がリアルだ。荒波の潮の香りと斜面の花の香りが伝わってきて、時代と歴史に絡む人々のなりわいが浮かんでくる。そこには作者が幼少時から見つめてきたものの濃密なものがある。そして、その人々の中には作者の母と、漁業労働中に事故で亡くなった育ての父も、典型のような位置で息づいているに違いない。

作品「越前蟹」「海辺の墓」「母の家」の三篇には、作者の家庭が登場する。父が〈語れないほどの過酷な冬の海で／身を削って操業しては捕ってきた蟹〉（「越前蟹」）を母は大事にこどもたちへ分け与えた。そんな母への敬愛の一方で、母が再婚家庭で作者だけを引きとり作者の弟を実家に預けたこと、いっしょに祖母に水泳を教わったかわいい弟が叔父に体罰を受けるなどあって、作者は〈母のような母には決して成るまい〉（「海辺の墓」）と生涯の決意をする。弟を思いやるところは痛切だ。そんな悲しい葛藤も、後に老いた母が一人海辺の家に暮らした様子にやわらいで、作者は母を思う娘にかえっていく。

作品「秘密」には越前のこども心の冒険が描かれ、「祭り太鼓が聴こえない」では小学生の時に弟と遊びに行った〈山里の親戚の家〉と祭りが描かれ、「忘れもの」からは青春の日のときめきがローカルな描写の親しみで甘酸っぱく伝わる。

そんな第一章「わたしの越前」の作品群は、やがて「温暖化」で現在の環境状況へいたり、環境の激変によって見られなくなった「浜昼顔」で再びこどもの頃に詩は結ばれる。〈所在なく悲しかった日など／一人浜に下りたち　海を眺めていると／その花はなびき／寄り添ってくれていたのに／浜昼顔の咲くところがもうない〉（「浜昼顔」）という回想はかなしいが胸をうつ。

母の再婚で転校した少女を襲ったものは、土着の閉鎖的な因襲による差別であった。弟とも別れ、

新しい友だちもなかなかできない海辺で、作者の心に寄り添ってくれたのは花たちだったのだ。次の「立葵の花」はさらにせつなく弟と二人で遊んだ記憶に〈路傍の花〉がつながっている。

そして、そのような濃密な「わたしの越前」の章のしめくくりに作品「海岸」がある。漁港の記憶も人生の回想もすべてが生きる越前の海岸で、作者の社会批評の眼も光る。愛するものの〈したたかな蘇りのときを待っている〉願いは、〈水平線上の原発立地に向ける眼差しが寂しげ〉な〈海鳥〉と重なる。

五

第二章「夜の歌」十篇は、作者の内面世界が個の深みで展開された作品群だ。「星空」「泥に棲(す)む魚」「夜の歌」「わたしの星」「ひとり旅」「都会」「夜の居場所」「ポプラの木」「おやすみ」「川のささやき」。ここにあらわれる第一章の書き方とは違った書き方に、読者はちょっと驚かれるかもしれない。各章を並べると鮮明な浜本はつえさんの詩表現の多彩さに、詩文学ファンは喜ばれるかもしれない。「わたしの越前」を背景にした作者の感性が、日々の人生の奥のところの内省で「夜の歌」をつづり、その静かで親しみ深い心をもって、人々と元気に「踊りの時間」（第三章）を生きる。章ごとに手法の変化を見せながら、この三つの章は一冊の全体の中で有機的につながっているのだ。

さて、この第二章の作品群であるが、作者にとって、夜は特別の領域であるらしい。ここで言う夜というのは、単なる時間の表面風景ではない。人生の深い象徴とも言える精神的なものを含んでいる。作者にとって内省は少女の頃から重ねられたものである。いろいろととりとめもなく思う夜と

いうのは誰にでも経験があると思うが、その親しみを感じさせながらも、この詩群にはそこをさらに越えた、心細さや不安を見つめながらの静かな潤いが感じられるのだ。その願いにはしんみりと共感させるものがあって、こちらの心も潤ってくる。作品「夜の歌」「川のささやき」をはじめ、ここには寄る辺ない生を生きる内面の普遍的な響きがある。

川のささやき

横になって目を閉じると
せせらぎが
聞こえてきた

宿の横は川だった

川は
独り言のように
単調な水の言葉で語り続け
一晩中流れていた

夢の中でズーッと
水の声を聞きながら

妙に安心して
眠った

目覚めても
やはり川はささやいていた

六

第三章「踊りの時間」十三篇は、母の死を書い

た「緋色の別れ」に始まり、家族そろっての貴重な思い出を響かせる「電車」、実の父の匂いのする「自転車」と回想が続く。

「谷空木」は立場が変わって、作者自身が幼少時に抱えたさびしさと似たものを、いま抱えているであろう一人の少女に寄せる思いである。ここには、他者のかなしみを自らのかなしみとするせつなさが出ている。

「雪深い山奥」では、越前というと海ばかりがイメージされるが、山あり谷ありの起伏の激しい土地であることがわかる。そして、そういう風景の中で生きてきた集落にある因襲の不気味さやそれをも吹き飛ばす生命の力などがおそらく経験者の目から暗示されている。

そういったものを見つめてきた作者の批評眼は、作品「フランス菊」にも鮮やかに生きている。

フランス菊

帰化植物
あるいは　よそもの植物とか
外国種
酷いときには侵入者
などと日本古来の植物で無いためか
こんな風に呼ばれている花

マーガレットの花は有名だけど
それにちょっとは似ているが
あんなに世話を受けなくても
やせて乾燥した土壌にでも
したたかに
道路わきの空き地などに
無造作に咲くことができる

ついこの間の
町内一斉清掃のときでも
そろって開花していたもので
花を付ける植物の良さで
雑草として刈り取られないで済み
こうして咲いていることができた

原産地はヨーロッパらしいけど
ヨーロッパの香りなど
まるで持ち合わせていない花
フランス菊という名ではあるけど
パリの街角など知る由もなく
この空き地の一画が気に入っている

けれどもほら
スクールバスから降り立った子が
お母さんに持ってかえるのだと
ランドセルの鈴をならしながら
喜々として摘みとっていった
そんな嬉しい日もあるのだ

〈よそもの〉にもいろいろな場合があるが、ここでは孤独な存在としての〈よそもの〉の命の側に作者は立っている。そして、壁を破るのが〈ランドセルの〉こどもであるというのも象徴的である。花のことを描きながら、私たちに社会の負の側面をも連想させる批評性をもっている。

次にほっとさせる趣の「はすの花」。

作品「踊りの時間」には、作者の前向きないまがほほえましく、すがすがしく、生き生きと表現されている。さまざまなことを経て、踊るのだ。みんなと踊るのだ。女であり続けて踊るのだ。この詩集全体を読んできてのこの詩に励まされるのは私だけではないだろう。変わりゆく越前に変わ

らない越前を刻み、いまこの地で生きている仲間たちと、日常の命を踊ること。それは、ひろくほかの土地で生きている読み手にも、人生の励ましとなって響いてくるだろう。

夫氏への照れながらの感謝がリアルな「おにぎり」、孫たちを描いた「雨降りの日」「ワタルくん」を経て、詩集はラスト二篇「春の広場」「未来」となる。

七

花の好きな作者はこの詩集いっぱいに水仙をはじめとするさまざまな花をうたっている。

それらの花々は、土地の歳月に風物として見られただけでなく、作者の幼年からの記憶とも結びつき、苦しいことの少なくなかった歩みにおいて常に励ましてくれる存在として、とても大切なものであり続けたのだ。

そうした含みがよく感じられるから、読み手にとっても単なるきれいな花という以上の詩的なものが伝わってくる。

「春の広場」はそんな花々の生の広場であり、こどもたちがいて、彼ら彼女らを見守る作者がいる。

命の声に耳を澄ませてきた人ならではの優しさで、作者は新しい命の「未来」を願って、詩集を閉じる。

いや、閉じるのではない。この詩集はこの最後の詩からさらに広範な私たち読み手の方へと、そっと開かれ続けていくだろう。

そう、あの越前の海辺、斜面の畑に咲く水仙の花のように。

浜本はつえ詩集『斜面に咲く花』栞解説文

佐相　憲一

コールサック社　2012